

## 書評

石原千秋著

## 『漱石の記号学』

木股知史

著者は、「本書は、漱石の小説テクスト全体を大きな物語として、たとえば「次男坊」「自我」「セクシュアリティ」と言ったテーマによって、歴史的な状況と関わらせながら横断的に論じようとする試みである」と、序章の冒頭に記している。漱石のテクストが生み出された歴史的コンテクストのかかわりを重視し、同時に、相互に関連する間テクスト性という視点から、漱石の小説表現の近代性の実質を明らかにするというのが、著者の試みである。

本書には、近代文学研究の方法に関して、二つの重要な問題提起が含まれている。漱石にそれほど強い関心を持っていない私にも、石原氏の試みに含まれている二つの問題提起

は、たいへん興味深いものに思われる。その一つは、ある小説表現についての複数の解釈が行われるということについての理解である。石原氏は、ある小説表現についての解釈がいくつも並行し、そのプロセスに終わりがなくことを「解釈ゲーム」と呼んでいる。「解釈ゲーム」という言い方は、複数の解釈の並立を、無限のたわむれとしてつきはなしていくように思えるが、石原氏の意図は、たぶんそこにはない。複数の理解に対して唯一絶対の解釈を求めることが可能だとする立場そのものを相対化するという意味が「解釈ゲーム」という言葉にこめられている。不可避に生み出される複数の解釈の並立という現象そのものをとらえる方法に関心が向けられているのだ。

私が、立ちどまりたいと思うのは、「読者」の位置」という考え方である。石原氏は、花袋の「蒲団」を例にあげて、登場人物の意識の外にあり、読者だけが察知できるような情報が示されている箇所を「読者」の位置」と呼んでいる。用語としては、注記に明示されているように、イーザーの「内包された読者」という概念が参照されているが、石原氏独自の理解に拡張されているように思われる。『虞美人草』のヒロイン藤尾に対して、作者漱石は否定的であったが、読者は藤尾を支持した。石原氏は、『虞美人草』の失敗が、「読者」の位置をテクストの中に用意しなかったことにある」と指摘している。『虞美人草』の失敗に学んだ漱石は、「意図的に主人公の男に死角をつくる方法を採用した」と石原氏は言う。たとえば、三四郎は、汽車で会った女を謎に満ちた誘惑者のようにとらえるが、「読者」の位置」を考慮すれば、千種・キムラ・ステイブンのように、自らの欲望に無意識である三四郎の像をあぶり出してみせることになる。美禰子は「三四郎の死

角で生きることが出来た」のであり、三四郎の視界では断片的で、謎を示し続けた美禰子が、「読者」の位置を踏まえれば、ジェンダーとしての主体をもった「他者」として現れることになる。「読者」の位置」という考え方は、登場人物の視点を相対化する言葉に關連しているように思われる。それは、フィクションの多層性の問題にもつながっている。小説のかたちに表現された言葉を均質にとらえ、また、そのことを少しも疑わない思考こそが、すべてを作者の意図に還元してしまふ。石原氏の「読者」の位置」という把握は、そうした平板な理解に対する理論的な反指定を含んでいるように思う。小説の言葉に位相の差があるという理解は、たとえば、亀井秀雄が『感性の変革』で提示した「視向性」という概念にも示されたことがある。私自身は、登場人物の關係の「相互性」に、テクストの内と外の言葉が干渉しあい、複数の解釈が生まれる場を見出そうとしたことがある。「読者」の位置」という理解は、小説の言語を作品という枠からどのように解放するかということを考えるとき、とても示唆的で

ある。ただ、テクストの内部と外部という問題は、処理のむずかしさをはらんでいる。漱石は、表現の方法として「読者」の位置を小説に設定するようになったと、石原氏は指摘した。だが、美禰子に明確な他者を見出すような「読者」の位置」を考慮した読みは、ずっと遅れて出現している。これは、「読者」の位置」が作者の方法だけではなく、時代のイデオロギーの推移が結晶化する場所でもあることを示しているように思う。小説の意味を問うということは、言語の技法の問題だけに限定できないし、テクスト外の社会的な諸概念とのかかわりを常に含むものなのである。もう一つの問題提起は、小説に書きこまれた制度や社会的慣習に關わる「文化記号」に注目しながら、個々の小説を横断しながら、共通するモチーフを明らかにしてゆくという方法を提示した点にある。登場人物が「長男」や「次男」であることが物語を作る際にどのように機能しているかが、規範的な觀念が現れやすい当時の通俗書や、法制度そのもの

を綿密に検討しながら考察されている。たとえば、明治民法の戸主の規定をめぐる、「戸主と家族とは別々のものとして記述されている」ことが見出され、「生まれながらの貴種」としての長男の位置づけが指摘される。そこから家督相続の物語への漱石のこだわりが導き出される。旧民法における長男の位置づけは歴史的な事実としては自明だといってもいいが、石原氏のように明確に、その自明な事柄を漱石の物語の動因としてとらえてみせた者はいないのではないか。小説の細部とテクスト外部の制度が通底している様相を探る読み方は、おもしろい視野を開いている。私が興味深く思ったのは、長男の「趣味」に關する指摘である。石原氏は、「趣味」を「無意識のうちに身体化」された「階級の内部の慣習」だととらえる。『ころ』の先生が、床の間を花と琴で飾った下宿の未亡人の趣味を、なまめかしいと軽蔑している場面をとらえて、石原氏は、先生の審美眼が「家産」によって支えられ、「父から受け継いだもの」であると指摘する。ここに、あくまで近代人としての先生の美意識を

見る読みを対置してみれば、「石原氏の理解の特徴が明瞭になるだろう。「趣味」の評価は、他の小説にも適用され、抱一の屏風の価値を理解しない『門』の宗助には、文人趣味の欠落が読みとられる。バックネット越しに野球をカメラで撮影すると、焦点の取り方によって、ネットの網目が映らないことがある。時代の規範的な観念は、存在しているが映らない網目のようなものだ。石原氏は、自明であるため、見えなくなっている時代の規範的な観念にたち戻るように読みを示している。石原氏は、小説内部の水位と、外部の制度の水位がちょうど均衡するところで、物語を読もうとしているように思える。

表現に浸透している時代の規範的な観念をあぶり出し、そこから表現の精密な地勢図をこしらえようとする読みは、カルチュラル・スタディーズとの関連を感じさせる。カルチュラル・スタディーズは、ソシュール以来の言語学を基礎とし、社会現象をテクストとして分析する。もともとその起源は、文化現象の分析にあたって、マルクシズムの経済的な決定論の不十分さを補充するということに

あった。だが、ラングのレベルにあるイデオロギー分析を主要目標とするため、規範的な観念の動向に価値を還元するテクスト決定論におちいる危険がある。石原氏は、「文化記号」に透視される時代の規範的な観念をまず測定し、そこからずれやねじれに、漱石の物語の起動力を見出しているので、規範的観念の機能分析に終わるカルチュラル・スタディーズとは、一線を画している。ただ、「文化記号」から導き出された読みが、テクストの下絵なのか、上塗りなのかという問題は残されているように思える。つまり、ある表現を価値づけすることは、どういうことなのかという原理的な問題が残されている。というより、本書の試みが、文学理論の中核にある問題を鮮明に浮き上がらせるのだ、と言ったほうがよいかもしれない。

それから意外に聞こえるかもしれないが、私には、石原氏の試みは、注釈の構造化という課題を提示しているように見える。恣意的な語注ではなく、表現全体の構造に関わる、文脈注、表現注、間テクスト注の可能性を示唆しているように思う。

かつて、私は間・作品論という着想で、自然な読みの崇拜と、作品論の拘束を破れないかと模索したことがあるが、理論的には何の奇手もできないでいる。緻密さと原理性を放棄せずに、間テクスト的な読みの可能性を示した石原氏に敬意を表したいと思う。

(きまた・さとし 甲南大学教授)

（講談社、一九九九年四月一〇日刊行、一五〇〇円）